

## モノによる理解

東京芸術大学大学院 日本・東洋美術史研究専攻

李 趙雪

このエッセイは、久々に東京に戻る飛行機の中で書いている。

2019年、長年の留学先である日本をしばらく離れ、中国美術史の調査研究の為、訪問留学生として台湾大学を訪れた。まさかこれが日本と永遠の別れのような2年間に発展してしまうことは想像もできなかった。今年3月、外国人の入国再開に伴い、日本に戻れることとなった一方、出発地の母国中国の北京では、感染者が発見されると、団地単位でロックダウンされる苦境だった。これからの世界はどうか、不安に思いながらろうじて旅に出た。

航空券の入手が難しかったので、私はてっきり機内は満員だと想像していたが、十数人だけが搭乗しているボーイング777-300機内の光景に驚いた。コロナ以前、日本行きの飛行機は常に観光客で満員だった。帰り道は航空会社の預入荷物許容量のギリギリまで詰めたお土産が載せられ、こんなに載せて飛行機はまだ飛べるのか疑問だという笑い話がよく聞こえてきていた。あの爆買い時代は、もう遠い昔のように感じる。

爆買い時代、銀座やお台場で買い物をしている母国の人々と遭遇すると、いつも少し恥ずかしい気持ちになった。しかし最近、彼らの行為や心境を徐々に理解できるようになった。それは、モノに対する執着というより、モノを作った人の考えや工夫などに対する愛着と言ったほうが妥当かもしれない。モノの背後にある製造者の知恵への憧れだった。商品と呼ばれるモノの移動を通して、中国人は使いやすい道具を作ってくれた日本人、綺麗な商品パッケージをデザインした日本人を理解した。

私にもこのような経験がある。側面がデコボコした「氷結」などのダイヤカット缶が「ミウラ折り」という技術を応用していることを、何年前にあるデザイナーから教わった。「ミウラ折り」とは、航空宇宙工学者の三浦公亮さんが考案した紙の折り方である。大きな紙をコンパクトに一瞬でたたむことができるため、太陽光パネルを小さく折りたたんで宇宙に持っていき、宇宙空間でぱっと広げることが可能な技術である。また菱形のような規則的な折り目を与えることで構造物の強度を補強するという成型技術でもある。そのため、「ミウラ折り」はNASA宇宙探査にとってきわめて重要な技術と言える。「ミウラ折り」の歴史を知った私は、その後、コンビニで並んでいる缶を観察することが癖になった。それは研究者やデザイナーの知恵の威力といってもよいであろう。宇宙探査から飲料の缶にまで使われている「ミウラ折り」から、日本人の発想には、とてもシンプルだが役に立つという特徴があることを理解した。

一方、長い鎖国の歴史を持つ日本もモノを通して中国を理解した。モノによる理解は古い歴史のある日中貿易史、ないし私の専門である美術史でもよく研究される内容である。

中国の王朝交代の際、自ら仕えた王朝への忠誠から、新たな君主や他の王朝に仕えない遺民たち（明朝

遺民や清朝遺民)は日本に避難した。その際、遺民の心境を理解することに大きく貢献したのは書画、篆刻、工芸品などの美術品というモノであった。当然、儒学の共通認識や漢字文化圏で筆談によって理解し合えたこともあったであろうが、漢文や儒学の普及には限界があり、全ての人が理解していたわけではないと思われる。江戸時代の庶民たちは浮世絵に描かれた三国志演義、水滸伝の物語から中国をイメージしただろう。

また、浮世絵の主題だけでなく、表現方法も蘇州民間版画に由来するものであったことが既に明らかにされている。蘇州民間版画を手本に浮世絵を制作した絵師、職人たちはその時代の中国通だったかもしれない。

さらに日本では古くから、中国舶来のモノに憧れを抱き、それを唐物と呼んだ。鎌倉、室町時代に中国から将来した天目茶碗という陶磁器や金襴という織物などはそれである。そしてお茶を嗜む文化の普及とともに、唐物の美意識も広がった。鎖国の歴史が長くても日中間にモノの交換・交流が途絶えたことはない。

相手にとって必要なモノを作って交換することは、人間の最も素朴な交流だが実に重要である。そのため、西洋は中国の英訳Chinaを小文字にして陶磁器(china)、日本の英訳Japanを小文字にして漆器(japan)という言葉はモノの代名詞として使用する。こうしたモノと国名の結び付きにとどまらず、店名や社名がモノに結び付けられることもよく見られる。それはモノによるアイデンティティーの表出である。

ところが、この2年間コロナの影響によりモノの交流が激減し、マスメディアやネット上の架空の情報交換が理解の主要手段となった。中国人の日本への好感度が大幅に低下したという日本の世論調査結果があるが、それは通常モノと言語の二次元的理解から、言語やデータだけの一次的理解へと変化したことが要因だと考えられる。そこで失われたのは、実際に見たり触ったり使ったりするモノである。相手の国の言語を理解できなくても、生活必需品、嗜好品、美術品などを通して他国のことを理解することができる。このことから言説だけではできない、モノを媒介とした二次元的理解が理想であると考えられる。